

**本** 会が発行した厚さ1センチほどの冊子が1冊手元に残っている。毎年多数の参加者を集めている「インタラクティブシンポジウム」の起源となった「インタラクティブ'97」シンポジウムの論文集である。当時のヒューマンインタフェース研究会（以下HI研究会：現ヒューマンコンピュータインタラクティブ研究会）の主催、6つの研究会など（うち2つは他学会所属）の協賛でこの会合が開催されたのは1997（平成9）年2月4、5日のことで、場所は東大本郷の山上会館だった。その後毎年行われているとすると今年でちょうど20回だったはずだ。主催した人たちは創設当時のことを知っていたのだろうか。20周年記念のお祝いぐらいはしてくれたのだろうか。

1996年の頃だったか、HI研究会の主査だった竹林洋一さん（当時東芝研究開発センター、現静岡大学教授）とその前の主査だった筆者が話をしていたときのこと。ヒューマンインタフェースの分野では、小学生の夏休みの絵日記みたいに「○○をつくって実装しました。面白かったです」のような、後に残らない自己満足の研究発表や論文(?)が多いのではないかと、質の高い、後に残ると考えられる研究だけに発表の場が与えられる、しっかりした査読付きのシンポジウムがあれば研究の発展に役立つのでは、ということになった。

その後まもなくHI研究会と学会の承諾を得るとともに、研究会メンバーが中心となってシンポジウムの準備に入った。名称は、従来からのインタフェース技術を連想させる「ヒューマンインタフェース」を使わず、世界的にはスタンダードになっていた「ヒューマンコンピュータインタラクティブ」という名称も将来を考えると狭すぎるかと考え、人かコンピュータかロボットかを問わずインタラクティブが重要になる時代になることを予期して、簡潔に「インタラクティブ」だけでいくことに決めた。

シンポジウムは竹林主査が実行委員長になり、論文集の巻頭言を書いた。その文章によれば、34件の応募があり、4名（一部3名）の査読者がフィードバック付

きの査読を電子メール（電子メールの普及が始まったのはこれより2年あまり前にすぎない）で行い、15件が採択された。「インタラクティブ発表」も15件行われた。実行委員は総務安村通晃（慶大：以下所属は当時）・小川克彦（NTT）、財務浜田洋（NTT）・井関治（NEC）さんなど19名、プログラム委員は副委員長長住伸子（津田塾大）さんなど32名、現在活躍している研究者が多数含まれている。セッションの座長は間瀬健二（ATR）、北原義典（日立）、松岡聡（東工大）、暦本純一（ソニー CSL）、増井俊之（ソニー CSL）、森島繁生（成蹊大）さん、パネルも行われ、パネリストは萩谷昌己（東大）、松山隆司（京大）、上林憲行（富士ゼロックス）さんだっ



[シニアコラム]

## IT好き放題



[No.70]

### 「インタラクティブ」シンポジウムの起源

た。私はプログラム委員長を務め、基調講演もした。

会場は、多数の出席者が文字通り「インタラクティブ」に発表し意見交換をする熱気に溢れ、大成功だったと記憶している。論文集には「第1回」とはどこにも書かれていない。最初のシンポジウムの成功を見届けてから第2回を考えたのかもしれない。あれから20年、始めの何度かは顔を出した記憶があるが、その後まったく無沙汰している。この会議が発展を続けているのは、初回以来20年にわたる関係者の多大な努力によるものであり、創設者の一人として深く感謝したい。

会誌2016年7月号(pp.672-673)、8月号(pp.798-799)に続けてこのシンポジウムに関する記事が載った。両方の記事とも（この分野では）「国内最大規模のシンポジウム」と書いてあって嬉しかった。その一方で、もしかしたら記事の著者は創設当時のことを知らないのではないかと考えた（違っていたらごめんなさい）。どこかのおじさんがいきなり出てきて昔話をされてもねー、と思われるかもしれないが、創設時代のこと、20年前にかかわっていただいた多くの方々のことがまったく忘れられてしまうには忍びない。好き勝手に書いてよい欄だということなので、20年前のことを思い出して書いた。「インタラクティブ」シンポジウムのますますの発展を願っております。

(2016年8月8日受付)

## 安西祐一郎 Yuichiro ANZAI

(独) 日本学術振興会

[名誉会員] anzai@jsps.go.jp

1974年慶應義塾大学大学院工学研究科修了。慶應義塾大学、北海道大学、カーネギーメロン大学等で情報科学と認知科学の研究教育に従事。2001～09年慶應義塾長。2011年より現職。1991～94年本会ヒューマンインタフェース研究会主査、2005～06年本会会長。